

仕合あせの和



第232号

令和3年 7. 1
(毎月1日発行)

大和言葉(やまとことば)

その三

住職 谷川寛俊

『いんにちは、さようなら』

「こんにちは」は「今日は、お元気ですか?」という挨拶です。

「今日」とは、太陽を敬って言う語で天道(てんとう)さまとも言い、

「太陽」を指す言葉です。

「古事記」に書かれているように、日本人は皆、天照大神(太陽)の分け御霊(みたま)と考えられてきました。天照大神と同じ太陽のエネルギーが「たま」として自分の中に宿ることを「霊(ひ)」といい、形あるものとして、生まれることを産霊(むすひ)と言いました。

大和言葉で「ひ」と発音する火・日・陽・光。これらの言葉と、霊は同じものを特徴ごとに表したものです。

日本人は、この「日(ひ)」を表す清く明るい生き方を惟神(かんながら)と言い、人として神に仕えるように生きる生き方を目指していました。それは清明心(きよきあきこころ)と言い、目がキラキラ輝き、笑顔で明るく物事を考え、心は清らかで、元気で素直な様子を言います。

そこで日中に出会った時は、お互いの「御霊(みたま)」の日が輝いて元気でいるかどうかを言葉で確認し合ったのです。

『むすこ、むすめ』

むすこ、むすめに共通して使われる「むす」は『君が代』の歌詞「若(こけ)の生(む)すまで」に使われている「むす」です。

むすは、岩に苔が生えるまで、長く長く続くという意味です。

「生(む)す」に男性を表す「子(こ)」がついて、「生す子(むすこ)」になり、

女性は「生す女(むすめ)」になりました。

どうして「むすこ」に「呼吸」という「息(いき)」の字を使うようになったのかと言うと、息は生命、息吹を表す言葉で「息」という漢字にも、(息をする)↓(生息する)の意味があり、「息」と「生す」は同じ様な意味を持つ文字でした。

「むすめ」はもともと「嬢(むすめ)」という字体でした。「嬢」と言う文字の右側の「襄(じょう)」は、着物の合わせに綿を詰めたものを表し、柔らかい女性と言う意味で「嬢(むすめ)」と言う字を使いました。

「嬢(むすめ)」から簡易化されたのが「娘」の字です。

息子も娘も元来、命の誕生や子孫繁栄の喜びや願いが込められた「生す」から来ています。

大和言葉には、深い意味が含まれているのです。

真成寺ホームページ



玉蓮山 真成寺

編集部 谷川久仁子

TEL・FAX 0765-22-2268

携帯 080-3744-2523

こちらの番号でも
お寺につながります。

